



「イスラームの人間観と死生観」

東京国際大学特命教授 国際交流研究所長／筑波大学名誉教授 塩尻 和子（しおじり かずこ）

1. 人間は神の被造物

第1回で述べたが、イスラームの教えは、宗教として特異なものではなく、キリスト教にも仏教にも共通する教義である。同様に、イスラームの人間観はユダヤ教・キリスト教の思想と同様であり、一神教の立場としては特別なものではない。

数年前に聖心女子大学でイスラームの人間観について講演をした際に、ある教授が「キリスト教の話をされたように聞こえた」とコメントされたことを思い出す。同じ系統に属する一神教であり、同じ神を信仰し、同類の聖書を奉じる宗教であるかぎり、ユダヤ教、キリスト教、イスラームには互いに共通する教義があることは、むしろ、当然である。しかし、共通項が多いことは、宗教同士の平和的共存にとって、決して有利な条件ではない。共通項が多ければ多いほど、本家争いが起きることは、残念な事実である。

イスラームの人間観は、まさにユダヤ教・キリスト教と同じ立場をとっている。それは「宇宙も森羅万象も人間も、この世界に存在するものすべてが全知全能の神の被造物である」という立場である。人間の能力によっては知ることができない全知全能の超越的な神は、この世界を創ることによってのみ自己を現す。つまり、この「世界」あるいはこの「宇宙」があることは、神がいるということを示している。

超越的な無限の神が一方的に有限な世界と人間を創造し、人間にこの世界のあらゆる存在物を与えたということは、神の人間に対す

る絶対的な「恩恵」の実証である。人間にとっては、このような世界、天地自然があるという事実は、これを創造した神の存在と愛を確信させるものとなる、と考えられている。

2. 世界観

この宇宙・世界は神によって創造されたが、「創られたもの」には「始まり」があり、「始まり」のあるものには終わりがある。世界の時間は天地の創造から始まり、天地の終末へと向かってまっすぐに続く直線的な「時間」の線上に展開することになる。このような時間観念は、輪廻転生を想定する東洋的な円環型の時間とは異なり、一つの時間は二度と戻ってこない。個々の人間は、その時間線上のある一点の、決められた時間に創造され生を与えられている。

イスラームの世界観（宇宙論）の特徴は、神はその昔、世界を創造したというばかりではなく、いまこの一瞬にも、一瞬ごとに世界を新しく創り替えていると考えられていることであるが、この思想（原子論的宇宙論）は、興味深いことに、キリスト教ではなく、むしろインド仏教の「種子説」という思想に近い。もっとも、神を立てない仏教では、「創り替える」のは神ではなく、「縁起」であるとされる。現代の細胞学では、人間の細胞は、瞬間瞬間に生まれ変わり、1週間くらいで、全身の細胞が入れ替わることが分かっているというが、意外なことにイスラームの世界観に似ているように思える。

3. 死生観

ムスリムも死者を悼み悲しむ気持ちは、私たちと少しも変わらない。しかし、人間の真実の「生」は来世にこそあると教えるイスラームでは、絶対的な神のもとで、現世も来世も人間が生きる場として想定されている。人間が、真実の生を生きるのは死後の世界であると考えられるので、イスラームでは、もともと死者と生者の区別はない。神の手によって創造された一個の「命」は現世での短い定められた期間を過ぎたなら死を迎えるが、神がこの世界を破壊する終末には、同じ人物として来世に復活し、そこで永遠の「命」を生きることになる。

このような復活思想について、私は「死をはさむ二つの生」という思想があると考えている。最初の生が終わった時の「死」は、新しい第二の生へ、永遠の生へと続く、なくてはならない道筋である。神の被造物としての人間はやがて神のもとに帰るという「帰天」の考えにしたがえば、人間は来世を目指して生きることが義務となる。

4. 葬送儀礼

イスラームの葬送は死者を来世へと「帰

す」儀式となる。ムスリムは死後、できるだけ早く埋葬されることが勧められており、また埋葬は必ず土葬であり、火葬は禁止されている。これは、遺体を火で焼くことは地獄の懲罰を指すことになるからである。

ムスリムの葬儀に参列する場合に注意すべき点は、花や香典などの供物を持って行く習慣はない、ということである。最近では王族や大統領などの葬儀には、花が飾られることもあるが、一般には花は祝い事にしか用いない。なお、現在でも女性は、死者が女性であっても、モスクでの葬儀には参列できない。墓地での埋葬には女性も参加する地域もあるが、弔問者がムスリムでない場合は、別途、家族に弔意を伝える配慮が好ましい。

イスラームの葬送儀礼は世界中、いつの時代も、基本線は変わらない。本来、人の死を敗北的な「死」と捉えない考え方、「死者は永遠に生きている」という強固な来世思想、墓を人生最後の棲家とはしないこと、遺体を焼却したり傷つけたりしないこと、質素で簡素な埋葬が基本とされること、などに、賛否はともかくとして、私たちも、改めて学ぶべき点があるように思われる。



アフガニスタン、ターリバーンの指導者ウマルのモスク。厳格なイスラーム集団の指導者にしては、不思議なほど淡い色合いの美しいモスクで、内部の伽藍も色取り取りである。(山田利行氏撮影)



リビア北西部、中世の隊商都市ガダーメス遺跡（世界遺産）の前にある市民の墓地。自然のままの石が置いてあるだけの簡素な墓地。(塩尻和子撮影)